

さりげなく人類最強格
が異世界から来るそう
ですよ？

我楽多零號

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界トータスから帰還したにも関わらず、元の地球せかいの裏側えんどうこうすけのあれこれに巻き込まれるという難儀な生活を送っている『深淵卿』こと、遠藤浩介。

そんな彼の元にまたしても厄介な案件が転がり込んできた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能ギフトを試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの『箱庭』に来られたし』

「あのく、俺そんなつもりさらさらないんで、帰っていいですか？ ……あれ？ 聞こえてます？」

神の使徒にすら察知されない影薄男の（精神的に）前途多難な箱庭ライフが始まる。

※この作品は、「ありふれた職業で世界最強」の原作を基本的に書籍版を、10巻後はWeb版を参考にしており、時系列的には本編終了後の物語です。書籍版やコミック版を中心に読んでいる読者には相当なネタバレとなります。

目次

第1話：すでに心が折れそうです。

1

第2話：影の薄さ？ 素ですが、なにか？

13

第3話：帰っていいですか？ あれ？

聞こえています？

22

第4話：なんか胡散臭いのが来た…。

37

第5話：やってもうた……。 | 50

第1話：すでに心が折れそうです。

帰還者。

それは、高校二年生でありながら、異世界トータスに召喚され、邪神とその使徒達と世界の存亡をかけた大戦を制し、そして地球へと生還したという尋常ならざる経験を経た者達。

その最たる者の名を、南雲ハジメ。

かつて“無能”または“最弱”という不名誉な称号を与えられた彼はしかし、地球に帰還する為の手がかりを探す旅の過程で、“世界最強”となり、最終的には“神殺しの魔王”となった。

最愛^{コエ}をはじめとし、今や多くの者達から信賴を集めている。そんな彼には、嫁達を除けば、最も信賴を寄せている男がいた。

仲間からは“魔王の右腕”、“さりげなく人類最強格”、“あいつ最近自動ドアが全

く反応しないんですけどマジで” 等と賞賛されるその男の名は——遠藤浩介。

地球に帰還して、9ヶ月以上経過した頃のことだった。

バチカンでの一件を経た遠藤浩介は、自室で一人、机に向き合っている。より正確に言えば、机の上に置いてある一枚の封書に、だ。

そこには、『遠藤浩介えんどうこうすけ殿』と書かれている。

「……………手紙…だよな？」

そう、どこから見てもただの手紙。それ以上でもそれ以下でもない。本当に、ただの手紙だ。しかし、浩介は訝しげに首を傾げる。なんなら少し警戒しているまでである。通常なら手紙を見ただけでこのように警戒するなどありはしない。

ただ、この手紙はおかしいのだ。

なにがおかしいのかと言えば、この手紙は彼の家のポストから取り出したものではなく、なんの前触れもなく、気がつけばそこに突然現れていたのだ。

今の浩介に全く気づかれることなく、手紙を置き去る。彼の知る限り、そんなことが

できるのはただ二人。

「また南雲がなにかしでかしたんじゃないだろうな?」

元の世界に帰還して以来、トータスにて『敵・絶・滅』を信条にしていたハジメはかなり丸くなった。どのくらい丸くなったのかと言うと、親しくなった友人相手に悪ふざけをするくらいに丸くなった。ただの悪ふざけならばまだいいが、魔王クオリティとなれば話は別だ。される側にしてみればたまったものではない。

手紙を開いたら、訓練用アーティファクトであるゲームの世界（遊園地のアトラクションをハードモードにしたレベルです。危険性はあんまりありません）に飛ぶ。なんてこともあるかもしれない。

もちろん確証はない。∴が充分に有りうることだった。というか、すでに前科がある。

無視するという選択肢はあるにはあるが、万が一、通常にして重要な手紙だったとしたら、まずい。

ならば、全て覚悟の上で封書を開けた方がいいと判断した。

ただの手紙なら儲け。ハジメからの素敵な贈り物だとしたら、ドンマイ。

そんなことを半ばなげやりに思いながら、とりあえずハジメから貰った“宝物庫ⅠⅠ”を身につけ、封書を開けるのだった。

ただ、浩介はもう少し視野を広げるべきだった。

自分を今の自分たらしめることとなる始まりが果たしてどのようなものであったかを、よく思い出すべきだった。

自分達^{帰還者}が、すでに理不尽に、非日常に好かれる存在になってしまっていることを考慮すべきだった。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能^{ギフト}を試すことを望むのならば、己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我らの『箱庭』に來られたし』

「……………ほあつ!?!」

気づけば、唐突な浮遊感。

急転直下、上空4000mほどの位置で投げ出されていた。焦って変な声をあげても仕方の無いことだろう。ついでに今のような状況でもハジメ作のアーティファクトを

使えば、全く問題ないことを忘れても仕方ないことだ。

パラ無しスカイダイビングがいつまでも続くわけもなく、真下の湖に着水する。いくら浩介の身体が一般人より多少頑丈だとしても、4000mから水面に激突すれば即死必至だ。しかし、落下地点に幾重にもある緩衝材のような水膜によつてそれは防がれた。

湖には大きな水柱が四つ立ち上った。

*

「……………うまく呼び出せた？黒ウサギ」

「みたいですねえ、ジン坊っちゃん」

「何から何まで任せて悪いけど……………彼らの迎え、お願いできる？」

「任せました」

「彼らの来訪は……………僕らのコミュニティを救ってくれるだろうか」

「……………。さあ？けど、主^{ホスト}権者^ト曰く、これだけは保証してくれました」

「彼ら三人は……………人類最高クラスのギフト所有者だ、と」

*

水中にて、身体力を抜き、浮力に身を任せる浩介の姿があった。

(ふく、マジで焦った。なんかよくわからんけど、助かったみたいだ)

理不尽や非常識にいつまでも囚われているほど浩介はヤワな男ではない。一旦落ち着き、水中ながら周りを確認する。

すると、浩介とは別に三つの水泡に包まれた人影を発見した。

(そういえば、空中でもチラッと三人の人影が見えたっけ)

ほんの一瞬だったが、男一人と女二人。それと……………。

(いたいた)

犬かきならぬ猫かきをしながら、その努力虚しく溺れている三毛猫の姿があった。

浩介は、三毛猫をすくい上げ、諸共に水面から顔を出した。

浩介がひと手間かけているうちに先に陸地上上がった二人の男女がそれぞれ悪態をついていた。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引き摺りこんだ挙句、空に放り出すなんて！」
「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に

呼び出された方がまだ親切だ」

「……………。いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう?」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

二人の男女が互いにフン、と鼻を鳴らして服の端を絞っている。

(おいおい、なんでいきなりピリピリしてんだ?)

いきなりどこか分からない土地に召喚された不安感によってピリピリはするだろうが、あの二人の場合は違うだろう。二人から不安感など微塵も感じないからだ。

「あれ? 三毛猫?」

もう一人の少女は、腰ほどの浅瀬でキョロキョロと辺りを見渡している。どうやら溺れていた三毛猫の飼い主らしい。

「ほら、この猫あんなのだろ?」

浩介は少女の隣まで歩み寄り、びしょびしょの猫を突き出した。

するとー、

「…?…!!??」

声が出た方を向いたものものすぐには浩介の存在を認識しきれなかったらしい。そしてその一拍後ビクッと少女の肩が震える。

どうやら突然浩介が隣に現れたと錯覚し、驚いたようだ。

遠藤浩介は、自動ドアすら反応しない（かつては3回に1回はちゃんど反応していたらしい）ほど影が薄い男だ。そんな彼は一部の例外を除けばほぼ誰からもその存在を忘れられるのだった。……例え、神の使徒であっても。

……毎度のことながら、そのような反応をされるとちよつぴり傷つく浩介くんであった。

そんな浩介から僅かに漏れた悲しそうな表情を察した少女は、無表情ながらも少し慌てて謝罪及び感謝の言を述べた。

「……………あ、ごめん。…ありがとう」

三毛猫を受け取り、少女は岸に上がった。

浩介もまた、それに続いた。その時、浩介は改めて周りを見渡す。

先程見えた、世界の果てを彷彿とさせる断崖絶壁。縮尺を見間違うほど巨大な天幕に覆われた未知の都市。そこは完全無欠に——、

（また……………異世界に來ちまつたんだな…。とはいえ、こういうのも、今更だよなあ…）
自分の不注意を軽く呪いながらも、やってしまったものは仕方ないと割り切ることにした浩介であった。

適当に服を絞り終わった少年は軽く曲がつたくせつぱねの髪の毛を掻きあげる、

「まず間違いないだろうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」
「そうだけど、まずは『オマエ』って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて」

（久遠、か。なんか見た目や口調といい、ちよつとした威厳を感じさせる雰囲気といい、いいところのお嬢様なのかな？）

「それで。その猫を抱きかかえている貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

（さっきの猫の飼い主。春日部っていうのか。ちよつと物静かだし、俺的には珍しいタイプの娘かも）

「そう。よろしく春日部さん。次に、野蠻で凶暴そうな貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蠻で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃った駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

（やべえ…。なんか逆廻こいつ、南雲と似た雰囲気を感じるんだけど…。こいつら絶対『混ぜるな危険』だよなあ……………）

「そう。取扱説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「ハハ、マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

心からケラケラ笑う逆廻十六夜。

傲慢そうに顔を背ける久遠飛鳥。

我関せず無関心を装う春日部耀。

そんな彼らを見て、一応自分も名乗っておくべきかと、満を持して浩介が自己紹介をしようとして、一歩前に出た。

「俺はえ……」

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

十六夜が苛立たしげに言う。浩介のことはガン無視で。

「いや、うん。俺もそう思うけど、とりあえず俺自身の説明をさせ……」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

飛鳥もまた十六夜に同意する。浩介のことはガン無視で。

「うん、そうだね！だからちよつと踏みとどまって後ろ見ようか！まだ俺のじこ……」

「この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「どうやら一度顔や声を見聞きしているはずの春日部も浩介の存在はすでに意識の埒外らしい。」

「……………」

とうとう黙り込んでしまった浩介は三者三様に悪態をついている様子をしばらく死んだ魚のような目をしながら眺めていた。

ホロリと、浩介の眼から光るものが落ちた。どうやら、雨が降り出しているらしい。雨と言ったら雨だ。

第2話：影の薄さ？ 素ですが、なにか？

進展しない状況にフラストレーションが溜まっていく問題児三人組は、わずかながら苛立たしげだ。

相変わらず浩介の存在に気づいてないようだ。彼らはキョロキョロと周りを見渡しているわけなので、浩介を視界に捉えているはずなのだが…。

（うん、俺の存在に気づいてないんだよな。そうなんだよな…。分かってる。へへ、慣れているさ。例え、今さっき対面した筈なのにすでに忘れられてたつて、ぜ、全然気にしてないし？俺つてば元の世界じゃリア充だし？だから、ホント、全っ然気にしてないし？）
などと、浩介は自分に言い聞かせながら精神を必死に取り繕う。全然取り繕えてないが。

（はあ……それにしても、逆廻の言う通り、この場に誰もいないのはおかしいよな。この召喚つて要は“招待”つてわけだし）

あの手紙の文を鵜呑みにするというのはのなら、の話だが。

(といつても、多分、あの茂みに隠れてるヤツがそうなんだろうけど……)

浩介には、優秀な聞き耳技能である「伝振」がある。空気の振動や壁の振動などから離れた場所の会話や音を拾うことができる浩介の前には生半可な隠形など無意味。

そこへふと十六夜がため息交じりに呟く。

「仕方がねえな。こうなつたら、そこに隠れてある奴にでも聞くか？」

その途端、茂みからザザツと葉が擦れる音が漏れた。四人の視線が茂みに集まる。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然、かくれんぼじゃ負けなしだぜ？ そっちの猫を抱いてる奴も気づいていたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「……………へえ？ 面白いなお前」

そんな三人に浩介は素直に感心する。

(やっぱこいつらもわかってたのか。なんとなく只者じゃないって気はしてたけど)

四人にあつさり気づかれたせいで、隠れている側が下手と思われそうだが、実は普通の一般人なら全く悟らせることがない程度には上手く隠れていたのだ。

(そんな奴のことは気づいて、なんで俺の存在には気づけないんだろう……)

隠形Lv：素の浩介>わりと本気の茂みのウサミミさん、という誇るべきなのか、哀しむべきなのかわからない微妙な現実には、とりあえず遠い目になる浩介であった。

三人の殺気の籠った冷やややかな視線を浴びつつ、ウサミミさんはやや怯みながらもその姿を現した。

「や、やだなあ。そんな怖い顔で見られても……」

「よおし、出てこねえんじや仕方がねえ」

「へ？」

痺れを切らしたのか、十六夜は常人ではありえないほど跳躍し、ウサミミ少女の元へ着地。同時に地面を大胆に抉った。

（うわっ、あの手紙から察するにこの三人もなんらかの力を持つてるとは思っていたけど、逆廻ってヤツもしかして普通に俺より強いんじゃないか？ 世界って広いなあ……）

まるで他人事のように十六夜に対する推測をする浩介。

浩介は、別にプライドの高い人間ではない。むしろ、生来の影の薄さで、あまり周囲から高い評価を受けないせいで、基本的に自己評価が低い。いつだつてとんでもない成果を出しているというのに……。

ウサミミ少女の姿が完全に顕になる。

「なにあれ？」

「コスプレ？」

「ち、違います！ 黒ウサギはコスプレなどではなく！」

（ウサミミかあ…。服装や髪色はともかく、なんとなくシアさんに似てるかな？ まさかハウリア族みたいなヤツじゃないだろうな？）

女性陣が各々疑問系を口にしての間、彼女が着ている若干のいやらしさと痛々しさを感じさせる服装に浩介はまったく見当違いなことを考えていた。

ハウリア族とは、トータスに住む兎人族の一族のことである。かつてのハウリア族もとい兎人族は、亜人族一穏やかで、臆病な種族だった。しかし南雲ハジメの魔改造訓練によつて、今や亜人族一危険で、最凶の、ついでにゴリゴリの厨二病種族となったのだ。

そんなハウリア族には疾影のラインフエリナ^ハハウリア（本名：ラナ、ただのラナ。大事なことなので三回言うが、ただのラナ）。という浩介の恋人がおり、将来的には浩介がハウリア族の族長になる予定なのだ。

さて、そこでなにか浩介の頭を悩ますのかと言えば、浩介の内に眠る「アレ」が関係しているのだが……。それはまた後の話。

十六夜の攻撃をあたふたしながらも躲し、木の枝に跳び乗る。が、しかしそのすぐ後ろにはいつの間にか黒ウサギ同様に木の枝に跳び乗っている耀の姿がある。そして、追いつき始める。

（春日部、だっけか。女の子にこう言つちやなんだけど、まるで猿みたいな動きだな。さつきも風上に立たれたら嫌でもわかるって言つてたし、なんか野生児というか、アニメでよくある動物に育てられた人間って感じだな）

浩介が耀のついて推測をしている隣で、飛鳥は空の鳥を視界に捉え、威厳ある声音で鳥達に指示した。

「鳥達よ、彼女の動きを封じなさい。」

「え？ ちよつ、わあ！」

空を飛ぶ鳥は、飛鳥の指示通り、黒ウサギを取り囲み、黒ウサギはその場に落下。

（今、久遠の指示に鳥が機械的なまでに忠実に動いたな。ユエさんの《神言》みたいな能力つてところか…）

「あう〜痛いです〜」

尻餅をつく黒ウサギは問題児三人組十浩介（ただそこに突つ立っているだけ）に囲まれ、四面楚歌となる。

黒ウサギは三人とどう接するべきか冷静に考えを巡らせていると、耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ち、黒いウサミミを根っこから鷲掴み、

「えい」

「フギャー！」

力いっぱい引つ張った。

「ちよ、ちよつとお待ちを！初対面で遠慮無用に黒ウサギの素敵耳を引き抜きに掛かるとは、どういいう了見ですか!？」

「好奇心の為せる業」

「自由にも程があります!」

「へえ?このウサミミって本物なのか?」

「じゃあ私も」

「ちよ、ちよつと待……………!」

右耳に十六夜、左耳に飛鳥がグリツプポジションをとり、左右に力いっぱい引つ張られた黒ウサギは、言葉にならない悲鳴を上げ、その絶叫は近隣に木霊した。

学級崩壊とは、まさにこのようなカオス状態のことを指すのだろう。

「はあ……………」

そんな状況に見かねた浩介は黒ウサギに助け舟を出した。己の精神を犠牲にして――。

「なあ、もうそろそろ話を進めてもいいんじゃないか?あんたら」

「「「?」」」

ピクリと問題児三人組と黒ウサギが反応。ようやく浩介の声が彼らに認識された。

が、その反応からの第一声は言わずもがな、である。

「誰だ、お前!?!」

「誰、貴方!?!」

「誰ですか、貴方は!?!」

全く同時に、三者三様に「Who are you?」。

ついでに耀があ、と気まずそうに小さく声を漏らした。

ですよねえ、と諦観に満ちた表情を浮かべる浩介。

「いや、そんなお前いつからそこに!?! って顔されても、俺、あんたらと一緒に空から落ちてきたし、流れに乗って自己紹介しようとしたら普通に無視されたし」

ははっ、と乾いた笑い声をあげ、遠くを見つめる浩介。改めて、今の今まで気づいてもらえなかったことを思うと精神的ダメージがジワジワと効いてくるようだ。

「ええっと、その、なんか、ごめんなさい」

そんな浩介の悲痛な雰囲気流石の飛鳥もしどろもどろに謝罪を述べた。

「へへ、いいって。よくあることだし、気にしてないし」

場がだんだん居た堪らなくなってきた。

「畜生つ、かくれんぼじゃ負けなしだったつてのに！」

十六夜は、間近にいたはずの浩介の存在に気づかなかつたことをわりと本気で悔しがっている。

「おいやめろ。そんな本気で悔しがるな。なんか泣けてくるから」

別に隠れていたわけでもないのに、かくれんぼ負けなしを自負する男に悔しがられてもただ虚しいだけである。

「それでは、貴方様もこの箱庭にいらつしやつたギフト保有者なのですね？」

黒ウサギは、浩介に対して申し訳ないと思いつつも、同士となる人間がさらに増えたことを喜んだ。

が、その言葉を受けた浩介は何故か、眉を八の字に下げて悲しそうな顔になった。よく分からない反応に、黒ウサギが戸惑う中、浩介は声音まで悲しそうにしながら尋ねる。「この箱庭にいらつしやつたのかつて、俺達のことピンポイントで召喚したんなら、俺のことも名前くらいは知つた上で召喚したんじゃないやなかつたんすか？」

「え？ 貴方様についての報告なんて……」

黒ウサギは戸惑う。みよんみよんと黒ウサギのウサミミがレーダーのように動く。

黒ウサギの目と耳は箱庭の中枢に繋がっている。そこから有効範囲内であれば、ある程

度情報が入る。

「逆廻十六夜、久遠飛鳥、春日部耀……………遠藤浩介？……………あ」

「うん、忘れてたんだよな？ そうなんだよな？ なんかよくわかんねえけど、うつかり見落としちゃうほど俺の影が薄かったんだろ？」

……………とうとうガクリと四つん這いになってしまふ浩介であった。

俯いた顔の様子はわからないが、髪の間からなにやら光るものが見えた気がした。

「…あー、なんだ？ それがお前の能力みたいなヤツなのか？」

「いや、素だ」

「そうか……………」

流石の十六夜もこれ以上はなにも言えなかった。

女性陣はハンカチで目元を拭い始めた。

浩介のおかげで、先程までの学級崩壊レベルの荒れ具合はどこへやら、四人の心は今この瞬間一つとなった。

その理由が、精神的自己犠牲をした浩介への同情心というのが実に悲しかった。

第3話：帰っていいですか？ あれ？ 聞こえてます？

彼らの前で項垂れる浩介。

そんな浩介を観察する彼らは各々彼に対する評価を挙げる。

(おいおい、自然すぎて逆に不自然なくらい “普通” なヤツだな)

(特徴らしい特徴が何一つ見つからないわね…)

(なんだろう、この感じ。ありふれているようで、初めて嗅ぐような…匂い…)

彼から漂う “普通すぎる” 空気に逆に戦慄する問題児三人組だった。

浩介の心をどうにか回復させ、黒ウサギは気を取り直して咳払いをし、両手を広げて、

「ようこそ、『箱庭の世界』へ！我々は皆様にギフトを与えられた者達だけが参加できる『ギフトゲーム』への参加資格をプレゼントさせていただこうかと召喚いたしました！」
「ギフトゲーム？」

「そうです！既に気づいていらつしやるでしょうが、皆様は普通の人間ではございません！その特異な力は様々な修羅神仏から、悪魔から、精霊から、星から与えられた恩恵でございます」

（恩恵………か。確かに、技能やら魔法やらを使えるようになった時は、子供みたくにはしゃいでたつけなあ……）

自分を今の自分たらしめる全ての始まりに思いを馳せる浩介。

異世界トータスに召喚され、その際に与えられた力。それはまさに『恩恵』と呼ぶにふさわしい代物だっただろう。

与えた張本人が、全ての黒幕、というふざけた現実でなければ。

それに、地球へ帰還した後のことだつて、その身に宿すこととなつた、一般人から見れば異常でしかないその様に何度疑惑の目やら蔑みの目を向けられたことか。

そう考えれば自分が持つ力を恩恵と呼ぶには少々皮肉に聞こえる。

……が、そんなことは今更だ。それに、そんな力でも、そのおかげで得たものは確かにあるのだ。

『ギフトゲーム』はその「恩恵」を用いて競い合う為のゲーム。そしてこの箱庭の世界は強大な力を持つギフト保有者がオモシロオカシク生活できる為に造られたステージなのでございますよ！」

両手を広げて箱庭をアピールする黒ウサギ。飛鳥は質問する為に挙手した。

「自分の力を賭けなければいけないの？」

「そうとは限りません。ゲームのチップは様々です。ギフト、金品、土地、利権、名誉、人間。賭けるチップの価値が高ければ高いほど、得られる賞品の価値も高くなるというものです。ですが当然、賞品を手に入れるためには「主催者」の提示した条件をクリアし、ゲームに勝利しなければなりません」

「……「主催者」って何？」

『ギフトゲーム』を主催し、管理する人のことですね」

「誰でもなれるの？」

「賞品を用意することさえできれば。それこそ修羅神仏から、商店街のご主人まで。それに合わせてゲームのレベルも、命懸けの凶悪、難解なものから福引き的なものまで、多種多様に揃っているのです。ございますよ！」

（この世界って神が当たり前のように跋扈してるのかあ……。うん。超帰りたいたい）

神の強大さを知っている浩介は、早くも帰郷を決心した。

『ギフトゲーム』とはこの世界の法そのもの、と考えてもいいのかしら？」

「それは八割正解の二割間違いです。我々の世界でも強盗や窃盗は禁止ですし、金品による物々交換も存在します。ギフトを用いた犯罪などもつてのほか！そんな不逞な輩は悉く処罰します。が、しかし！『ギフトゲーム』の本質は全く逆！一方の勝者だけが全てを手にするシステムです」

「そう。なかなか野蛮ね」

（野蛮通り越して理不尽でしょコレ…。強いヤツはどんどん強くなって弱いヤツはとことん冷遇されるってことじゃん。なにがオモシロオカシクだよ…。すでに闇が見えるよお）

もはや嫌な予感しかしない、といった様子で頭を抱える浩介。

もちろんこれが箱庭の全てのシステムというわけではないが、聞く限り相当弱者に対し容赦ないシステムだ。

浩介の心中を知る由もない黒ウサギは、四人にある提案をしだす。

「話を聞いただけではわからないことも多いでしょう、なのでここで簡単なゲームをしませんか？」

「この世界にはコミュニティというものが存在します」

そういうながら黒ウサギはトランプを取り出し、シャツフルしながら説明を続ける。

「この世界の住人は必ずどこかのコミュニティに所属しなければなりません。いえ、所属しなければ生きていくことさえ困難と言っても過言ではないのです！」

パチンとフィンガースナップ。どこからともなくカードテーブルが現れ、ドスンと着地する。

「みなさんを黒ウサギの所属するコミュニティに入れてさしあげても構わないのですが、ギフトゲームに勝てないような人材では困るのです。ええ、まったく本当に困るのです、むしろお荷物・邪魔者・足手まといなのです！」

明らかな挑発に目を細める四人。言い方からして機嫌を損ねる可能性は充分にあった。

問題児三人組の場合、プライドの高さ故か逆に焚きつけられ、「上等」とでも言いたげな顔つきになるのだが、常識人の浩介にそれは通じない。

「ああ、邪魔になるんなら帰っていいっすか？そもそも、元の世界の全てを捨てて来い的なこと書いてあったけど、俺そんなつもりさらさらないんで」

「……………」

ある意味空気の読めない発言に、場は静寂と化す。

その中で、十六夜が訝しむような目を浩介に向けた。

黒ウサギの顔が、挑発的なものそのままのように固まり、なにやら汗が滝のように溢れているように見える。

やがてカクカクと壊れたロボットののように挙動不審になりながら、

「……ジシンガナイノデアレバ、コトワツテクダサツテモケツコウデスヨ？」

と、絵に書いたような片言で、浩介の発言をなかつたことのように続けた。

「……あれ、聞こえています？ 聞こえますよね？ 今無理矢理話を進めてますよね

？ ダメつすよ？ わざと気づいていないふりしてもわかりますからね？」

そこへ口を挟んだのは十六夜だ。なにやら面白そうなものを見るような目をしている。

「まあいいじゃねえか。どうせとやかく言ったところで今すぐ帰れる保証なんざねえんだからよ」

「ぐ……そりや確かにそうだけだよ」

十六夜に諭され、浩介は渋々身を引くことにした。十六夜は視線を黒ウサギに移し、ゲームのルールについて聞いた。だした。

彼らを見て、黒ウサギはホッと一息つきつつ、

「ゲームにはこのトランプを使います。この52枚のカードから絵札を選んでください。ただし、チャンスは一回、一人につき一枚までとします」

「方法はどんなことをしてもいいの?」

「ルールに抵触しなければ。ちなみに黒ウサギは審判権限ジャッジマスターという特権を持っていますので、ルール違反は無理ですよ?ウサギの目と耳は箱庭の中枢と繋がっているのです」

「チップは?お前の言う恩恵ギフトつてのを賭けるのか?」

「今回皆様は箱庭に来てばかりなので、チップは免除します。強いていえば、あなた方のプライドを賭けると言ったところでしょうか」

「私達が勝つたら?」

「そうですね。その時は、神仏の眷属であるこの黒ウサギが、なんでも一つあなた方の言うことを聞きましょう」

(なんでも一つ……だど?)

その一言についっ反応しちやう浩介君。男の子だもの。

「ほお、なんでもか?」

軽薄そうに笑う十六夜の視線が黒ウサギの豊満な胸部へ。

男同士、考えることは同じらしい。浩介と比べて遠慮がまったくないが。

黒ウサギが慌てて一部訂正する。

「で、でも性的なことは駄目ですよ!」

十六夜に白い目を向ける飛鳥と耀。まさか貴方も、と言わんばかりに浩介の方にもそ

の視線は向けられる。スッと目をそらす浩介君。だってしょうがないじゃないか！男の子だもの！

「冗談だよ。……で、どうする？」

三人に返答を促す十六夜。

「どうもこうも」

「うん。やろつか」

飛鳥も耀も断る気はないらしい。

「まあ、別にいいか……」

浩介も、チップ免除ならば、別に断る理由はないので、参加を宣言。

「それでは、ゲーム成立ですね！」

そう言うや否や、虚空から羊皮紙が現れる。

「それは？」

「ギアスロール契約書類です。いわば、ゲームに関する契約の書」

『ギフトゲーム名 スカウティング

・プレイヤー一覧

逆廻十六夜

久遠飛鳥

春日部耀

遠藤浩介

・クリア条件 テーブルに並べられたカードの中から絵札のカードを選ぶ。

・クリア方法 選べるカードは一人につき一枚まで。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

『サウザンドアイズ』印』

「OK、わかった。だがその前にそのカードを調べさせてもらおうか」

「かまいませんよ?」

契約書類を確認した十六夜は、黒ウサギにランプカードの提示を要求。黒ウサギはなんの疑いもなく承諾した。

カードを一枚ずつ目を通していく十六夜。

一枚の絵札の裏側に爪で傷をつける飛鳥。

三毛猫の唾液の匂いを絵札につける耀。

(イカサマのオンパレードだなあ……)

彼らのイカサマ現場を横から眺めていた浩介。

とはいえ、ルールに抵触していないのだから仕方ない。黙って目を瞑ることにした。トランプは全部で52枚。うち、絵札は全部で12枚—3/13。適当に引いても当たらないわけではないが、確実に勝つなら心許ない確率だ。

多分、黒ウサギは彼らがイカサマをすることは織り込み済みだろう。

それでもなければ、このような穴だらけのゲームなど仕掛けるはずがない。

黒ウサギは、彼らが勝つか負けるか、ではなく、どのような手段で勝つのかを見たいのだろう。値踏みも兼ねて。

もちろん、そんなこと浩介が知る由もないし、わかってたところで知ったことではない。

浩介はとにかく、事を荒立てたくないのだ。なにより、自分のあの忌まわしき力をあまり他言したくないのだ。

そんなわけで、

(ま、普通にやろつと)

と、イカサマ抜き、よく言えば正々堂々、悪く言えば適当に勝負を受けることにした。

「では、ゲーム開始です！」

黒ウサギはなにやらテンション高めな様子で、ピースサインを横に、そして額にかざしポーズをとる。少々香ばしいポーズに浩介の中の「アレ」が「呼んだ？」とチラリと顔を出す。必死抑え込む浩介君。

「誰からいく?」

「…じゃあ、俺からいかせてもらおうぜ」

十六夜が一步前に出た。

十六夜が並べられたカードを全体的に見回し、そしてカードを選んだ。

カードを引くその直前。

「さっきは素敵な挑発をありがとよ」

え? とカードの方に意識を集中させていた黒ウサギが咄嗟に十六夜の方に向けられたその瞬間。

「これは、お礼だ!」

ドン、と大きな音を立てて掌をカードに叩き込む十六夜。

その衝撃で周りのカードは舞い上がり、何枚かのカードは、表側を上には舞い落ちた。

ポカンとしている黒ウサギ。

ポカンとしている浩介。

飛鳥と耀は、その間に表となった絵札をそそくさと回収。我に返った浩介も便乗して

絵札を回収した。

そこへ黒ウサギは待ったをかけるが…。

「なにもルールには抵触してないぜ？ 並べられたカードから絵札を選べ、一人一回一枚まで。違うか？」

正論により、ぐ、と怯む黒ウサギ。中枢からの判断を仰ぐが、有効とされた。

しかも当の十六夜もしつかり絵札を選んでいた。理由を尋ねると、単純にカードの並び順を覚えたらしい。

ガツクリとする黒ウサギに満足気な問題児三人組。

「並び順覚えたのは普通にスゲエと思うし、便乗してなんだけどさ。えげつないことするなお前」

「そうね。おかげでこちらで考えていた策が無駄になったわ」

「うん」

「ヤハハ、そりゃ悪かったな」

十六夜は、項垂れている黒ウサギに視線を戻した。

「おい、黒ウサギ。さつそくだが、言うことを聞いてもらうぜ？」

「ふえ?!だ、駄目ですよ!?!性的なことは!」

十六夜が悪い笑みを浮かべているのを見て、よもや本当に?と言いたげな表情で、腕

で自分の胸部を隠す仕草をする黒ウサギ。

「まあ、それも魅力的ではあるんだが……。俺が聞きたいことはただ一つ」

十六夜は視線を黒ウサギから外し、他の三人を見回し、巨大な天幕によつて覆われた都市に向ける。

彼は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……面白いか？」

他二人も無言で返事を待つ。

（『家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨てて箱庭に來い』……か）

改めて言うが、浩介にそんな気はさらさらない。なにせ、浩介には帰る場所があり、帰りを待つている人がいるのだ。

そう考えると、少し違和感を感じる浩介。

（他の三人は、多分、それだけの理由があつて箱庭に來た。でも俺は違う。仮に箱庭の世界の存在を知っていたとしても来ようとは思わないし、今だつて別に居たいとは思わない。この箱庭に元の世界の全てを捨てる程の価値は感じない。ならなんで俺は召喚された？あの手紙はただの建前で、合意があるうがなかるうが、召喚されていた？）

ただの善意か、遊び心で退屈を持て余していた異能力者に箱庭という遊び場をプレゼントする。はつきり言つて意味があるとは思えない。

けれど、別に不自然とは思わない。

事実、浩介の人生一度目の召喚では、神の遊戯の一つの余興として、しかももとより勇者のみを召喚するはずが、ついでとばかりに無意味に引き摺り込まれたのだから。

召喚イコールなんらかの意味がある、とは思わない。

けれどー。

(いや、やめよ。どうせそのうち南雲が迎えに来る。俺が今ここにいる意味なんて考えるだけ無駄だ)

よく、正義の味方や勇者が、『俺がこの力を手にしたのは、なにか意味があるのかもしれない』なんていうが、**実際意味なんてほとんどない**。あつたところでロクなものじゃない。トータスにいる勇者天之河光輝(笑)がいい証拠だ。

浩介が一人考えを巡らせていると、クイクイと、服の裾が軽く引つ張られた。犯人は浩介の隣に佇んでいる耀だ。

「どうしたの？」

「ん？ いや、なんでもない」

小首を傾げながら小声で尋ねてくる耀を見た浩介は顔に出てたかも？と少し焦りな

がらもいつも通りの様子に戻った。

そこへ、黒ウサギはー。

「YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者たちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証いたします♪」

眩しいほどに優しげな笑顔。その顔には一部の嘘もないだろう。

そんな黒ウサギを見て、浩介は軽くため息をする。

浩介は箱庭に長居する気はない。南雲ハジメが迎えに来たらすぐに帰るだろう。

けれど、それまではー。

(とはいえ、せっかく異世界に来たわけだし、まあ、少しぐらい、箱庭の世界ってヤツを満喫していいか…)

箱は蓋を開けなければ、何が入っているかわからない。

そう自分に言い聞かせ、ルンルンとステップを踏む黒ウサギの後に続くのだった。

第4話：なんか胡散臭いのが来た…。

「ジン坊ちやーん！新しい方を連れてきましたよー！」

しばらく天幕に向かって森の中を進んでいると、箱庭の外壁と内側を繋ぐ入口に辿り着いた。そこにはジンと呼ばれる10歳前後の少年が佇んでいた。

「お帰り、黒ウサギ。そちらの女性二人が？」

「YES！こちらの皆様が……………」

クルリ、と振り返る黒ウサギ。

カチン、と固まる黒ウサギ。

「……………え、あれ？もう二人いませんでしたっけ？ちよつと目つきが悪くて、かなり口が悪くて、全身から『俺問題児！』ってオーラを放っている殿方と、…………と、特徴らしい特徴がなくて……………ええつと、顔がよく思い出せないです……………と、とにかくとっても存在感が薄い殿方が」

「十六夜君なら、ちよつと世界の果てを見てくるぜ！」と言つて駆け出しして行つたわ
あつちの方に、と指をさすのは上空から見えた断崖絶壁。呆然となつた黒ウサギはウ
サミミを荒ぶらせて二人に問いたです。

「な、なんで止めてくれなかつたんですか！」

「止めてくれるなよ」と言われたから」

「どうして黒ウサギに教えてくれなかつたのですか!？」

「黒ウサギには言うなよ」と言われたから」

「嘘です、絶対嘘です！実は面倒くさかつただけでしょう御二人さん！」

「うん」

orzと言つたように前のめりに倒れる。

「因みに遠藤君は……」

と、付け足すように飛鳥が指を今度は別方向にさす。

「貴女のすぐ隣にいるわ」

黒ウサギの右横に。

「誰が特徴らしい特徴がなくて、存在感が薄いだ。いや、その通りだけでも」

「うきやアアアアアアアアアア!!??」

浩介の少し怒気を含んだ声が唐突に聞こえ、黒ウサギがビビクンツと震える。ついで

にウサミミとウサシツポがピーンと逆立つ。

もつとついでに言うのと、その隣にいたジンもビビクンツと震えていた。

ジンは我に返り叫んだ。

「大変です！ “世界の果て”にはギフトゲームのため野放しにされている幻獣が」

「幻獣？」

「は、はい。ギフトを持った獣を指す言葉で、特に “世界の果て” 付近には強力なギフトを持ったものがあります。出くわせば最後、とても人間では太刀打ち出来ません！」

ジンが必死で事の重大さを訴えていると、黒ウサギはため息を吐きつつ立ち上がった。

「はあ……ジン坊ちゃん。申し訳ありませんが、御三人様のご案内をお願いしてもよろしいでしょうか？ 黒ウサギは問題児を捕まえに参ります」

そう言って艶のある黒い髪を淡い緋色に染めていく。

「“箱庭の貴族”と謳われるこのウサギを馬鹿にしたこと、骨の髄まで後悔させてやります」

全力で駆け出した黒ウサギは弾丸のように飛び去り、あつという間に四人の視界から消え去っていった。

その様子について飛鳥が代表で感想を呟く。

「箱庭の兎は随分速く跳べるのね。素直に感心するわ」

うん、うん。と頷く耀と浩介。

「ウサギ達は、箱庭の創始者の眷属。力もそうですが、様々なギフトの他に特殊な権限も持ち合わせた貴種です。彼女なら余程の幻獣と出くわさない限り大丈夫だと思おうのですが……」

（トータスの兎人族とはえらい違いだな）

きつと、ハウリア族を見たら黒ウサギは卒倒するに違いない。居た堪らないので黒ウサギとハウリアは絶対に合わせてはいけなないと判断した浩介であった。

「紹介が遅れました。コミユニテイのリーダーをしてるジン＝ラッセルです。さあ、こちらへどうぞ。箱庭の中をご案内します」

ジンに連れられ、石造りの通路を通って箱庭の幕下に出る。

パツと頭上に眩しい光が降り注いだ。

「外から天幕の中に入った筈なのに、太陽が見えてる」

「あ、ホントだ。マジックミラーみたいだ」

「箱庭を覆う天幕は内側に入ると不可視になるんですよ。そもそもあの巨大な天幕は太陽の光を直接受けられない種族のために設置されていますから」

「あら、この都市には吸血鬼でも住んでいるのかしら？」

「え、居ますけど」

「……………そう」

（箱庭の吸血鬼は直接日光を浴びれないのか。やっぱ、異世界だけあって同じ種族でも在り方が違うんだなあ…）

複雑そうな飛鳥を尻目に浩介は、自分の知り合いである吸血姫様のことを思い出す。

「この箱庭には様々な種が住んでいます。それこそ、神仏、悪魔、精霊、獣人、人間。もつともこの東区画のこの付近では農耕地帯が多いので、住人達の気性も穏やかですけど」

ジンに箱庭の住人についての簡単な説明をされながら白く清潔感の漂う洒落た感じのカフェテラスの近辺まで歩いた。

「まだ召喚されたばかりで落ち着かないでしょう。詳しい話は軽く食事を取りながらでもいかがですか？」

ジンに促され、一行は身近にあった「六本傷」の旗を掲げるカフェテラスに座った。（そういえば、今日はまだなにも食べてなかったつけ？ ……この世界にはサーモンサンドあるかな？）

注文を取るために店の奥から素早く猫耳の少女が飛び出してきた。

「いらっしやいます。御注文はどうしますか？」

「えーと、紅茶を三つと緑茶を一つ。あと軽食にコレとコレと…」

「サーモンサンド」

「はっ」

サーモンサンド大好き浩介さん。メニューに載っていたのを見て歓喜した。

箱庭のサーモンサンドの味はいかがなものかと期待している浩介の隣で、ニャンニャンと三毛猫が鳴く。

「はいはい。ティーセット四つにサーモンサンド、ネコマンマですね」

「……………ん？と飛鳥とジン、浩介が不可解そうに首を傾げる。しかしそれ以上に驚いているのは耀だった。」

「三毛猫の言葉、わかるの？」

「そりやわかりますよー。私は猫族なんですから」

『ねーちゃんも可愛い猫耳に鉤尻尾やな。今度機会があつたら甘噛みしに行くわ』

「やだもーお客さんつたらお上手なんだから♪」

……………猫耳娘の言葉から、どうやら三毛猫は相当なやり手のようだ。

店内へと戻る猫耳娘の後ろ姿を見送った耀は嬉しそうに笑って三毛猫を撫でた。

「……………箱庭つてすごいね、三毛猫。私以外に三毛猫の言葉がわかる人がいたよ」

『来てよかつたなお嬢』

それを見ていた飛鳥とジンが耀に対して興味津々に質問攻めしだした。

曰く、生きているならどの動物とも会話できる模様。

(あらゆる生物と会話か…。そりゃ確かにスゲエな。帰還者^{俺達}の“言語理解”は人語限定だし。“念話石”使えば多分会話できると思うけど互いにつける必要があるしなあ)

「そう……春日部さんは素敵な力があるのね。羨ましいわ」
笑いかけられると、困ったように頭を搔く耀。

「久遠さんは」

「飛鳥でいいわ。よろしくね春日部さん」

「う、うん。飛鳥も同じ力……」

耀が言っているのは先程の鳥達のことだろう。

「ああ、違うのよ。あれはそういうんじゃないの」

飛鳥は憂鬱そうな声と表情で呟く。どうやら飛鳥は自分の力をあまり好ましく思っていないようだ。

その様子を見て、耀は話題転換も兼ねて浩介に話を振った。

「そういうえば、遠藤はどんな力をもってるの?」

当の浩介はというと、女の子二人でガールズトークを展開して完全に蚊帳の外だろうなあ、と話題を振られると思っていなかったようで、少しバツが悪そうな表情^{かお}をしている。

ついでに飛鳥にはさん付けなのにこちらは呼び捨てかと扱いの差に若干シヨックを受けたようで、最近自分のことを呼び捨てするようになった某魔王の娘が素敵にサムズアップする姿を幻視した。

耀があげた話題に飛鳥も食いついた。

「それは私も気になるわね。私達の中で唯一貴方だけがまだ片鱗すら見せていないのはなくて？」

「あー、まあ、他人に見せるもんでもないし……」

注目する三人に対し、浩介は茶を濁す。その代わり嘘は言っていない。ただ、訂正する部分があるとすれば、「見せるものではない」のではなく、「見せたくない」の方が正確だ。もし見られでもしたら、とても正気でいられる自信がない。間違いなく、自分の殻に閉じこもるだろう。

もちろんそんな曖昧な説明では到底納得できない問題児二人。

二人が詳細を尋ねようとしたその時、

「おんやあ？ 誰かと思えば東区画の最底辺コミュ〃名無しの権兵衛〃のリーダー、ジン君じゃないですか」

「ガルド……」

品のない上品ぶった声がジンを呼ぶ。振り返ると2mを超える巨体をピチピチの夕

キシードで包む変な男がいた。

「……………どなたかしら？」

「初めまして、お嬢様方。私はコミュニケーション・フオレス・ガロ”のリーダー、ガルドⅡガスパー。以後お見知り置きを」

（うわあ……………なんか絵に書いたような胡散臭そうな奴が出てきた…）

しかも、ガルドはお嬢様方と言った。当然、浩介のことは含まれていない。

「貴方の同席を認めた覚えはありませんよ。ガルドⅡガスパー」

「黙れ、この名無しめ。聞けば新しい人材を呼び寄せたらしいじゃないか。コミュニケーションの誇りである名と旗印を奪われてよくも未練がましくコミュニケーションを存続させるなどできたものだ。そうは思わないかい、お嬢様方」

飛鳥と耀に愛想笑いを向けるが、その失礼な態度に二人は冷ややかな態度で返す。

「事情はよくわからないけど、あなた達二人の仲が悪いことは承知したわ。それを踏まえて質問したいのだけど」

飛鳥はガルドではなく、ジンに向けて鋭く睨む。

「ねえ、ジン君。ガルドさんが指摘している、私達のコミュニケーションが置かれている状況……………というものを説明していただける？」

「そ、それは」

ジンは言葉に詰まる。飛鳥はその動揺を逃さず畳み掛ける。

「貴方は自分のことをコミュニティのリーダーと名乗ったわ。なら黒ウサギと同様に、新たな同士として呼び出した私達にコミュニティとはどういうものかを説明する義務があるはずよ。違うかしら？」

追求する声は静か、されどナイフのような切れ味でジンを責める。

それを見ていたガルドは、含みのある笑顔と上品ぶった声音で、

「レディ、貴女の言う通りだ。コミュニティの長として新たな同士に箱庭の世界のルールを教えるのは当然の義務。しかし彼はそれをしたがらないでしょう。よろしければ『フォレス・ガロ』のリーダーであるこの私が、コミュニティの重要性和ジン＝ラッセル率いる『ノーネーム』のコミュニティを客観的に説明させていただきますが」

飛鳥は訝しげな顔でジンを見るが、ジンは俯いて黙ったままだ。

仕方なくガルドに説明を委ねた。

曰く、コミュニティとは複数名で作られる組織の総称。

曰く、コミュニティとして活動するには「名」と「旗印」を申告しなければならぬ。

曰く、ジン達のコミュニティは東区画最大手にして最強のコミュニティだった。

曰く、しかしそのコミュニティは滅ぼされ、「名」と「旗印」を奪われた。箱庭最大

にして最悪の天災、 “魔王” によって。

「魔王？」

魔王というワードにピクリと反応する浩介。なにせ、彼は異界の存在であるうえ、ただの呼称にすぎない、しかしその実力は魔王と呼ばれるに相応しい男の右腕なのだから。

飛鳥や耀も浩介ほどではないもののそれなりに馴染みのある単語に眉を顰める。

「“魔王” にギフトゲームを挑まれば最後。誰も断ることはできません」

“魔王” とは、ホストマスター主催者権限という特権階級を有する修羅神仏のこと。無論その力はそれぞれ差異あれど強大であることに変わりはない。

ガルドはコミュニティと “魔王” について一通り説明すると不愉快な笑みを浮かべた。さも、ここからが重要とでも言いたげだ。

「名も、旗も、主力陣の全てを失なった時、もしも新たなコミュニティを結成していたなら、前コミュニティは有終の美を飾っていたんでしようがね。今や名誉も誇りも失墜した名もなきコミュニティの一つでしかありません」

「……………」

「名もなき組織など信用されませんし、優秀な人材が、名誉も誇りも失墜させたコミュニティに集まるでしょうか？」

「そうね。誰も加入したいとは思わないでしょう」

「そう。彼は出来もしない夢を掲げて過去の栄華に縋る恥知らずな亡霊でしかないのですよ」

品のない、豪快な笑顔でジンとコミュニティを笑うガルド。

ジンは顔を真っ赤にして両手を膝の上で握りしめていた。

「もつと、言えばですね。彼はコミュニティのリーダーとは名ばかりで殆どリーダーとして活動はしていません。コミュニティの再建を掲げていますが、その実態は黒ウサギにコミュニティを支えてもらうだけの寄生虫」

「……………」

「私は黒ウサギが不憫でなりません。ウサギと言えば『箱庭の貴族』と呼ばれるほど強力なギフトの数々を持ち、何処のコミュニティでも破格の待遇で愛でられるはず。コミュニティにとってウサギを所有しているのはそれだけで大きな『箔』が付く」

「……………」
「そう。事情はわかったわ。それでガルドさんは、どうして私達にそんな話を丁寧に話してくれるのかしら？」

飛鳥は含みのある声で問う。ガルドもそれを察して笑う。

「単刀直入に言います。もしよろしければ黒ウサギ共々、私のコミュニティに来ませんか？ 私のコミュニティは旗印を賭けたギフトゲームに連戦連勝。今やこの地域を治

める程になりました。ジン＝ラツセルの「ノーネーム」と比べどちらが裕福かなど、考えるまでもないでしょう?」

「な、何を言い出すんですガルド＝ガスパー!?!」

ジンは怒りのあまりテーブルを叩いて抗議する。

しかしガルドは獰猛な瞳でジンを睨み返す。

「黙れ、ジン＝ラツセル。そもそもテメエが名と旗印を新しく改めていれば最低限の人材はコミュニティに残っていたはずだろうが。それを貴様の我儘でコミュニティを追いこんでおきながら、どの顔で異世界から人材を呼び出した!」

「そ………それは」

「何も知らない相手なら騙しとおせるとでも思ったか? その結果、黒ウサギと同じ苦労を背負わせるってんなら……こつちも箱庭の住人として通さなきゃならねえ仁義があるぜ」

獣に似た鋭利な瞳に貫かれて、ジンは僅かに怯む。

その間にガルドは再度彼女達に勧誘しようとする。

そこで、不意に声が上がった。

「仁義って言葉、辞書で調べ直した方がいいんじゃない?」

第5話：やっつてもうた……………。

どこか場にそぐわない、飄々とした声音。大して張り上げたわけでもないのに、やけに明瞭に響き渡る。その主は、今まで静聴していた浩介だった。

「……………なんですか貴方は？ 藪から棒に…。私は今そこのお嬢様方と大事な話をしてい
るのです。突然会話に横槍をいれておいてその言い回し、失礼ではありませんか？」

突然、意気揚々と勧誘をしているところを邪魔され少し不機嫌そうな様子で浩介を睨むガルド。

しかしながら、的外れなことを言う彼に、浩介は、はあ…。と、ため息を吐いた。

「いやいや。藪から棒じゃなくて最初から俺居たから。むしろ四人で会話してるところに横槍入れてきたのお前だから」

「……………なに？」

ガルドが飛鳥、耀に、え？ そうなの？ 的な顔を向けると、二人は肯定という意味合い

で肩を竦めた。

「どうやらガルドさん、今の今まで浩介の存在に気づいていなかったらしい。

今度はガルドが浩介に胡乱な眼差しで睨まれることとなった。

「…………ゴホン。失礼、ジェントル。しかし先程の言葉はどういう意味です？」

誤魔化しの咳払いをしつつ、しかし先の言い回しにしろ、態度にしろ浩介のことが気に食わないのか、先の発言について食ってかかった。

というわけで、浩介は遠慮なく語ることにした。

「お前みたいな小物感満載なヤツが仁義なんて大層な言葉使う必要ないって言ったんだよ」

「んだと!？」

額に青筋を浮かべるガルドを無視し、浩介は話を続けた。

「まず、他人の不幸を嬉嬉として語ることが既に小物の所業だろ？ それに、競い合う間柄とはいえ、子供相手によくもまあ、あんな嫌な言い回しができるもんだ」

浩介の呆れた様子にますます苛立つガルドだったが、ここはぐつと我慢。

「…………しかしジェントル。先程も申しましたが、そのジン||ラッセルは、皆様方を謀ろうと…………」

「みたいだな。……………で？」

「で、つて…」

「そんなことお前の口から語られるまでもなくすぐに明るみに出ることだろ。無論、褒められたことじゃないだろうけど、それでも、仲間の為にやったことだろ？ コミュニティを復興したいって純粋な想いからやったことだろ？ ……なら、俺は“有り”だと思うぜ？」

につ、と笑いながら驚いた様子のジンの頭をくしゃくしゃと撫でる浩介。

そんな光景を瞳に写す飛鳥と耀。

ほんの数時間の付き合いだが、ほとんど影が薄かったり、項垂れたり、困ったような笑みを浮かべたりなど、お世辞にも好印象とは言えなかった浩介が、こういった笑い方をするのは少し意外であった。

ジンの愚行を賞賛しているように見える浩介にガルドは嘲笑うように指摘する。

「……わかっていませんね…。名と旗印を奪われたコミュニティの復興というのが、どれほど困難な道か…。こんな夢物語を語ること自体がそもそも間違いなのですよ。ましてや……」

「それは、お前が決めることじゃないだろ？」

浩介は、泰然とした声音でガルドの論理を制した。

「ジンがコミュニティを復興する道を選ぶのも、黒ウサギがコミュニティを支え続ける

のも、俺達がどのコミュニティに行くのも、すべてにおいて、お前が決めることじゃない。〃自分で決める。そして行動する〃。それだけのことだ。間違つてなんかないんだよ」

〃自分で決める。そして行動する〃

当たり前なことだ。でも、そんな当たり前ことを本当の意味で遂行できるものは、果たしてどれほどいるだろうか？

世論に、常識に、理屈に囚われて自分自信に不可能という壁を作つてはいないだろうか？

浩介は、そんな壁をぶち壊して、全ての理不尽に抗つてみせた男を知っている。

その男から教わつたのだ。

抗うことの大切さを。そして、その先にある可能性を……！

「必要なら、俺は手を貸すぞジン＝ラッセル」

「……え？ ……ほ、本当ですか!？」

騙そうとした挙句、自らのコミュニティに入るメリットがほぼ皆無にも関わらず、手を貸すと言われたことに心底驚いたジンは歓喜を含めた声を上げた。

「とはいえ、俺にも俺が選んだ道がある。いつまでもつてわけにはいかない。あんなこと言つておいて悪いけど」

「い、いえ、とんでもありません!!」

「……」

自分があればだけ落してやったものを、あつかりと流し、「ノーネーム」加入を了承する浩介を見て、小さく舌打ちをするガルド。

ガルド的に、野郎が弱小に流れたところでどうでもいいが、「ノーネーム」を蹴落とす為に「フォレス・ガロ」の武勇伝を語ったことが仇となり、なんとも勧誘を蹴られ、「ノーネーム」に持つていかれたという構図ができてしまった。実に屈辱である。

ならばと少女二人に話を振ると、答えは――。

「結構よ。だってジン君のコミュニケーションで私は間に合っているもの」

は？ とジンとガルドは飛鳥の顔を窺う。

彼女は何事もなかったかのようにティーカップの紅茶を飲み干すと、耀に笑顔で話しかける。

「春日部さんは今の話をどう思う？」

「別に、どっちでも。私はこの世界に友達を作りに來ただけだから」

「あら意外。じゃあ私が友達一号に立候補していいかしら？ 私達って正反対だけど、意外に仲良くやっていけそうな気がするの」

口にしときながら気恥しそうな飛鳥に対し、耀は無言でしばし考えた後、小さく笑っ

て頷いた。

「……うん。飛鳥は私の知る女の子とちよつと違うから大丈夫かも」

『良かったなお嬢……お嬢に友達ができてワシも嬉しいわ』

「女の子の友情って、喜ばしいよなあ……」

ホロリと泣く三毛猫。

「またも蚊帳の外かと思いついながらも、つい最近、ガールフレンド（本人は嫁になりたいと思つている）に友達ができたことで嬉しく思つたことを思い出し温かな目をする浩介。」

そして、リーダー達をそつちのけで盛り上げる二人。

「ガルドは全く相手にされなかつたことに顔をひきつられ、それでも取り繕う様に大きく咳払いして二人に問う。」

「失礼ですが、理由を教えてくださいませんか？」

「だから、間に合つてるのよ。私、久遠飛鳥は、裕福だった家も、約束された将来も、おおよそ人が望みうる人生の全てを支払つて、この箱庭に来たのよ。それを小さな一地域を支配しているだけの組織の末端として迎え入れてやる、などと慇懃無礼に言われて魅力的に感じるとでも思つたのかしら。だとしたら自身の身の丈を知つた上で出直して欲しいものね、この、エセ虎紳士」

ピシヤリと言い切る。

ガルドは怒りで体を震わせたが、自称紳士として言葉を必死に選ぶ。

「お、お言葉ですがレデ」

「黙りなさい」

ガチン！とガルドは不自然な形で、勢いよく口を閉じて黙り込んだ。

「……………!? ………………!?」

「実は私、少し気になっていることがあるの。貴方はそこに座って、私の質問に答え続けなさい」

飛鳥の言葉に力が宿り、今度は椅子にヒビが入るほど勢いよく座り込む。

突然尋問を始めた飛鳥に浩介は特に驚くような様子もなく、話しかけた。

「あ、やっぱり気づいてた？」

「当然でしょ？」

先んじて話してしまうと手を打たれかねないと思つて伏せていたが、浩介がガルドになびかなかつた最大の理由がそこにはあつた。

ガルドは大きな墓穴を掘つたのだ。自分達を大きく見せるのに夢中で。

まず、魔王でないガルドが名と旗印をかけるギフトゲームを何度も続けるのは負けた場合のリスクと照らし合わせれば、現実的にほぼ不可能だ。

こんな矛盾、冷静に話を聞いていれば誰でも判る。

ガルドの頭の悪さと幼稚さが明るみになる。突き詰めれば、“リーダーの器”なんかじゃないことが嫌でもわかる。

そんなリーダーに人が付いてくるだろうか？ 周りが余程のろくでなしでない限り答えは否だ。

となれば、如何にして団員をまとめているのか……想像に難くない。

ただ、現実はいつだって想像よりもクソツタレだ。

「……………は？」

ガルドの発言に、その場の空気が凍りついた。

ジンも、耀も、飛鳥も、浩介でさえ、一瞬耳を疑って思考を停止させた。

ガルドは女子供を人質とすることで相手にコミュニケーションを賭けたギフトゲームを強制した。

……そして、その人質は、すでにガルド達の手によって殺されていた。

「初めてガキ共を連れてきた日、泣き声が頭にきて思わず殺した。それ以降は自重しようと思つたが、父が恋しい母が愛しいと泣くのでやっぱりイライラして殺した。それ以降連れてきたガキは全部まとめてその日のうちに始末することにした。だが、身内のコミュニティの人間を殺せば組織に亀裂が入る。始末したガキの遺体は証拠が残らないように腹心の部下が食」

「黙れ」

ガチン!!とガルドの口が先程以上に勢いよく閉ざされた。

「素晴らしいわ。ここまで絵に描いたような外道とはそうそう出会えなくてよ。流石は人外魔境の箱庭の世界と云つたところかしら……ねえジン君?」

「彼のような悪党は箱庭でもそうそういません」

「そう?それはそれで残念。ところで、今の証言で箱庭の法がこの外道を裁くことはできるかしら?」

「厳しいです。吸収したコミュニティから人質をとつたり、身内の仲間を殺すのは勿論違法ですが、裁かれるまでに彼が箱庭の外に逃げられてしまえば、それまでです」

「そう、なら仕方ないわ」

苛立たしげに指をパチンと鳴らす。ガルドを縛り付けていた力が霧散し、体に自由が戻る。怒り狂つたガルドはカフエテラスのテーブルを砕くと、

「ん…………この小娘がアアアアアア!!」

雄叫びとともにその体を激変させた。

体毛が変色し、黒と黄色のストライプ模様が浮かび上がる。その様はまさにワータイガー。

「テメエ、どういうつもりか知らねえが…………俺の上に誰が居るかわかってんだろっなあ?!」箱庭第六六六外門を守る魔王が俺の後見人だぞ!!俺に喧嘩を売ることはその魔王にも喧嘩を売ることだ!その意味がー」

「黙りなさい。私の話はまだ終わってないわ」
ガチンとまた勢いよく黙る。

しかし今の怒りはそれだけでは止まらない。ガルドは丸太のように太い剛腕を振り上げて飛鳥に襲いかかる。

それに割って入るように耀が腕を伸ばした。

「喧嘩はダメ」

耀が腕を掴む。お世辞にもガルドのような剛腕とはいえない華奢な腕でガルドの拳を止めたのだ。

それはガルドに更なる屈辱を与えた。

「……………つつつつ!!」

怒りが臨界点を突破しているせいか、もはや我武者羅にもう片方の腕を耀に向かつて振り抜いた。——ということはなかった。

「……………ふっ、女子供相手に穢らわしい罵声と暴力を振るうとは…。自称紳士が聞いて呆れる。この程度の輩に葬られたとあらば、死した者達の魂も浮かばれんというもの」
「っ……………」

犯人は浩介だ。ガルドがもう片方の腕を振り上げた瞬間、その腕を掴み後ろに押さえつけたのだ。ついでにガルドの重心を支配し、身動きを取れなくしている。

飛鳥も耀もジンも少し戸惑った様子。

しかしそれは、浩介がガルドを押さえつけたことが原因ではなかった。

その原因は浩介の様子だ。

普段の浩介より、声のトーンが低いし、喋り方も変だし。

そしてなにより、ガルドの動きを制しているおり、空いている片手の中指でどこから取り出したのかワンレンズタイプの手ングラスを押さえ、妙なポーズを極めている！

「……………遠藤……………君？」

敵を拘束しながらも香ばしいポーズをとる浩介に三人は戸惑いを隠せない。

戸惑いつつも声をかけた飛鳥に浩介は反応する。

「久遠、そしてジン。俺もこの救いようのない外道を裁くことに賛成だ。とはいえ、あく

まで決定権はそちらにあると心得ている。ならば、どうする？」

「……………」

そんな浩介を見て飛鳥と耀は小さく笑みを零した。

なぜ変な口調なのか、なぜ変なポーズをとっているのか。聞いてやりたいことはあるがこの際放っておく。

浩介のサングラスの奥から覗かせる眼から伝わる確固たる自信と意志。

少し頼りないと思っていた男から、この先どのようなことが待っていていようととも打破してみせようという自信と意志が見て取れたからだ。

飛鳥は楽しそうに笑いながらガルドを見やった。

「さて、ガルドさん。私は貴方の上に誰がいようと気にしません。それはきつとジン君も同じでしょう。だって彼の最終目標は、コミュニケーションを潰した『打倒魔王』だもの」その言葉にジンは大きく息を呑む。内心、魔王の名が出た時は恐怖に負けそうになった。

しかし、それ以上にジンの中にある言葉が木霊のように残っていた。そう、言ってくれたのだ。ジン達がとった本来無礼極まりない行動は、『有り』なのだ。ジンが選んだ愚行は、間違っ道てなどいないと。

その言葉が、ジンを後押しした。

「……………はい。僕達の最終目標は、魔王を倒して僕らの誇りと仲間達を取り戻すこと。今さらそんな脅しには屈しません」

ジンの揺るぎない言葉に、浩介は賞賛とばかりに「ふっ」をする。

「そういうこと。つまり貴方には破滅以外のどんな道も残されていないのよ」

「く、くそ……………」

飛鳥は機嫌を少し取り戻し、悪戯っぽい笑顔で話を切り出す。

「だけどね。私は貴方のコミュニケーションが瓦解する程度では満足できないの。貴方のような外道はズタバポロになって己の罪を後悔しながら罰せられるべきよ。そこでみんなに提案なのだけれど」

ジンは首を傾げる。耀と浩介は飛鳥のしたいことがおおよそ検討がついているので静かに清聴する。

飛鳥は女性らしい細長い綺麗な指先でガルドの顎を掴み、

「私達と『ギフトゲーム』をしましょう。貴方の『フォレス・ガロ』存続と『ノーネーム』の誇りと魂を賭けて、ね」

ガルドは飛鳥の提案を呑むしがなく、青ざめた表情で帰っていった。

その様を見送り、ガルドの姿が完全に見えなくなった途端、浩介は、無言で、しかし、誰が見ても分かるほど死に切った瞳で、さつと踵を返すと、ふらふら、よたよたと歩き出し、やがて店の壁の隙間に身を寄せて小っちゃくなつた。

何事かと目を丸くしている三人の前で、浩介は膝に顔を埋めると小さく、しかし、はつきりと呟いた。

「とうとうやってもうた……」